



ミュージアム・レター

Gakushuin University Museum of History Museum Letter No.18

発行日 ● 平成24年(2012)2月16日

もくじ

- ごあいさつ……………1
- 史料館の蔵書—「文庫」を中心に—……………2・3
- 史料館の文庫……………4
- 史料館の文庫を利用するには……………4

■次回史料館展覧会のお知らせ

平成24年度 学習院大学史料館 常設展
「大正の記憶—絵葉書の時代」展
 2012年4月5日(木)～6月9日(土)
 学習院大学史料館展示室(北2号館1階) 入場無料
 平日 12時～17時 土曜日 10時～17時
 休館日 日・祝、5/15(火)
 ※4/8(日)入学式、4/15(日)第26回「オール学習院の集い」は閉館(10時～17時)

ごあいさつ

学習院大学史料館は、研究に加え、展示などの教育普及活動を行う一方、レファレンスライブラリーとしての図書館機能をあわせ持っております。今回は、それに関する特集をお送りします。

研究者や作家は本を大量に持つ蔵書家であるのが普通です。彼らにとって、書物は仕事に欠かせないものですから、経済的事情が許す限りせっせと買入れるわけですが、人生のある時期に達すると、蔵書の多さに悩むこととなります。大学教員の場合、定年が間近になると、退職後に研究室の本が自宅に収まるのかどうか、という問題が生じます。この時点で、教え子たちに譲る、古書店に売るなどして、自ら蔵書整理をする人もありますが、最大の問題は、没後の蔵書の行方でしょう。自分が関心を寄せてきたあれこれのテーマに沿って集めた書物群にはそれなりの筋道がありますから、分散させたくない、というのが持ち主の希望でしょう。しかし、それが実現するのは稀有な場合と思われます。学習院大学史料館の六つの「文庫」はそうした稀有な例といえるでしょう。

「児玉文庫」をはじめとする史料館の「文庫」は、個人が研究的関心をもって集めた書物をまとめて譲り受けたものです(詳細は次ページ以降)。同様の問題意識をもつ人にとっては、先達が集めたこれらの文献の中に、自分の研究に大きな示唆を与えてくれるものが含まれていることでしょう。さらに、蔵書を手がかりとして、それを集めた人の思想を研究するという道もあります。いずれにしても、肝心なのは、これらの書物が大切に継承されるだけでなく、常に利用可能であるということです。「読まれない本」というのは、本としての存在を全うしているとはいえません。

そこに、蔵書家が自ら集めた本の多さに悩む契機の一つがあります。ふと齢を意識して、残りの持ち時間では集めた本を読みきれないと気づくと、本に対して、済まない、という気になるらしい—という他人事のようなのですが、これは最近の私自身の悩みでもあります。私が読めなくとも誰かに読んでもらえることを念じて、「高橋文庫」を残しましょうか？

それはさておき、「文庫」の形成と寄贈に関わられた方々に改めて感謝申し上げ、貴重な書物が時代を超えて読み継がれていく場として、史料館も志を新たにしたいと思います。

(館長 高橋裕子)



明治42年(1909)に建てられた学習院の図書館(現史料館) 閲覧室
 史料館には、今もあかりとりの天窓や窓などに当時の面影がのこる

「大札奉献学習院写真」大正4年(1915)